

# 教師人生を 楽しむ

野口芳宏



米寿を迎えてなお、  
授業人としてただ直  
向きに歩み続ける教  
師。良き師、良き友、  
良き書物から多くを  
学んだその一端を自  
身の論文から紹介す  
る。また、教師人生  
とともに歩んだ全国  
の著名な実践家から  
寄せられた文章を併  
載した「読む」記念碑。

教師人生を  
楽しむ心

野口芳宏



✿ さくら社

## 教師人生を楽しむ —— まえがきに代えて ——

千葉大学の教育学部を出て小学校の教員になり、学校現場だけで38年間を過ごした。退職と同時に大学の教員となり80歳までお世話になった。この間に出合った教員仲間との勉強会が、米寿になった今でも続いている。唯々有難い。

腹の底から「教師になってよかった」「教師人生は楽しい」と思っている。私にとっては、教員人生こそが、ザ・ベストだったのだ。今でもその教師人生を各地の実践者と楽しみ続けて実に65年にもなる。元気でさえあればまだ暫くは「一級の教師」との出会いに恵まれる。まさに「教師人生を楽しむ」である。

ところが、現在はその教師人生を「楽しむ」どころか「苦しみ、悩む」人があり、休職、離職者も多く、学校現場の教員不足が常態化し、その影響からか、教職志願者が激減していると聞く。

何とも残念で淋しい思いである。大袈裟に言えば「教職氷河期」とも言えようか。そんな時に「教師人生を楽しむ」という言葉が、些ちかかなりとも「氷を解かす」ことに役立てればと心か

ら願う。本書を手にして下さった「一級の教師」のあなたとの出会いに感謝を捧げたい。有難い稀有の御縁である。

さて、「楽しむ」ということである。私は拙著の読者からサインを求められると「教師人生を楽しむ」というフレーズを好んで認める。そして、「いろいろ御苦労もおありでしょうが、どうぞ、教師人生を楽しんで下さい。教師は本当に素晴らしい仕事ですから」と付け加えることにしている。

この「教師人生を楽しむ」という言葉は、私の「本音、実感、我がハート」そのものなのだが、その大本は『論語』（雍也篇）にある。「それを知っておるといだけの者は、それを愛好する者に及ばず、それを愛好する者は、それを真に楽しむ者には及ばない」（諸橋轍次訳）。諸橋先生は、「孔子としては、恐らく人倫の道に対する知・好・楽の三段階について述べたものであろう」と注記している。読み下し文は、「之を知る者は、之を好む者に如かず。之を好む者は、之を楽しむ者に如かず」である。私の大好きな言葉だ。教師人生を楽しめる教師が一人でも増えてくれればと思うこと切である。

自選論文にも紹介している私の生涯の師、平田篤資先生は、ある時、語るともなく「俺は時々、野口君を羨しく思うことがあるよ。」と言われたことがある。私は耳を疑う思いだった。先生

は日本最高の東京帝国大学医学部を出られた俊英、秀才である。その方が、私如きを「羨しい」などと思われることがあるのだろうか。信じられない言葉である。私は「滅相もないお言葉です。」と応えた。先生は続けて、「医者なんてのは病気になった人を、元に戻せればいいだけのことだ。せいぜい元どおりにしかできない。あんたは、これから伸びていく子供を、もつと望ましく伸ばす仕事をしているんだものなあ。」と言われたのだ。

余りの勿体ないお言葉の前に、私は坐り直し、手を突いて「有り難うございます。」と言い、言葉に詰まって涙ぐんだ。「そうか。そんなに尊い仕事に、私如き者が就かせて戴いているのか。」と教えられたからである。

私は、小学校の一教師に過ぎないが、その任務も責任も、大きな価値を持った重いものなのだ。それは、自らの職業に対する大きな誇りともなるものなのだ。胸を張って事に当たろう、とも思った。持つべきは「師」である。

令和六年十一月吉日

観音堂の書齋にて

編著者 野口芳宏 記す

教師人生を楽しむ——まえがきに代えて——

野口芳宏

3

## 第一章 野口芳宏 自選論文集

「良き師、良き友、良き書物」——自選論文に寄せて——

一 どのような人と、どう出合ってきたか

12

二 何を、いつ、どう読んできたか

15

三 子ども中心主義への生物学的批判

57

四 先生は「教える」、子どもは「教わる」

67

## 第二章 教師人生を支える 野口語録

- ・○か×かは、○か×かじゃよ。  
石川 晋 78
- ・「本音・実感、我がハート」を語る以上、批判、反論……  
小笠原喜一 80
- ・私の学級の子どもたちは、日本で一番たくさん作文……  
陰山英男 82
- ・絵を描くことの苦手な子供だけを集めておくから、……  
酒井臣吾 84
- ・多忙とは、世間から相手にされている証拠である。  
佐藤幸司 86
- ・泥縄型準備  
城ヶ崎滋雄 88
- ・「見ていてくれた」という信頼感が心を開く。  
竹川訓由 90
- ・教師だけでなく子どももの反応にもレンズを向けて。  
多田元樹 92
- ・教育成立の三条件 信・敬・慕 「信」とは、信じら……  
玉置 崇 94
- ・頼まれたら断らない。  
俵原正仁 96

- ・日本の教育を「元気にするにはやたらに上に聞かない」……

塚田直樹

98
- ・「子供個々の解の尊重」「教師の解を押しつけない」……

鶴田清司

100
- ・第二に、全般的な印象として、これは「実践記録」で……

庭野三省

102
- ・集団を束ねる

樋口雅子

104
- ・一般的には授業はとかく教師が「やりいいようにやる」……

前田康裕

106
- ・およそ人を教育するものにとって大切なことは、本質……

宮内主斗

108
- ・小学校の一年に私が入学すると同時に、結核の病に冒……

望月善次

110
- ・なぜか、本当か、正しいか。

森 万喜子

112
- ・こんな美味しいものが、こんな値段で食べられるなんて……

横田経一郎

114
- ・頼まれたら断らない。

横藤雅人

116
- ・授業で人格を磨く「授業道場」

横山駿也

118

# 第三章 教師人生を変えた野口実践

- ・「うとてとこ」の授業を読み解く 明石要一 122
- ・作文教育に対する考え方を根底から変えた野口実践 伊藤孝之 124
- ・人生を変える野口実践 宇野弘恵 126
- ・授業UDの原点 桂 聖 128
- ・父子愛く忘れ得ぬ野口家初訪問 駒井康弘 130
- ・学び続ける野口先生の背中からたくさん学んでいます。 小路健太郎 132
- ・選択的発問と意図的指名 瀧澤 真 134
- ・国語学力を保障する「野口国語」の奥義 照井孝司 136
- ・鑑賞とは、「理」を読み、「相」を描き、「情」を読み取ること 照井孝司 138
- ・幸福の条件 中嶋郁雄 140
- ・野口実践の魅力 平河 力 142

・国語学力は①読字力②語彙力③文脈力

平野卓也

144

・授業を「機能させる」ということ

堀 裕嗣

146

・教師人生が変わった二つの節目の野口実践

松澤正仁

148

・子供を泣かせる

山田洋一

150

・提案が読者へのサービスだ

山中伸之

152

・野口芳宏个体史研究抄録

柳谷直明

154

〈コラム〉 私にとっての人との出会い

〈コラム〉 素直さの正体

〈コラム〉 意味の深い食事の挨拶

34

76

120

## 付 章 「野口芳宏先生 師道の碑」 建立事業

あとがき

多田元樹

166

156

## 第一章

# 野口芳宏 自選論文集

「良き師、良き友、良き書物」——自選論文に寄せて——

- 一 どのような人と、どう出合ってきたか——私をゆさぶった人・変えてくれた人——
- 二 何を、いつ、どう読んできたか——読む楽しみを教えてください——
- 三 子ども中心主義への生物学的批判
- 四 先生は「教える」、子どもは「教わる」

## 「良き師、良き友、良き書物」——自選論文に寄せて——

野口芳宏

人としての教養を高める手立てとしては、「良き師、良き友、良き書物」の三者との出会いが重要だと教えて戴き、深く領いたことを思い出す。全くその通りだと、狭いながらも自分の体験を通して実感している。思い返せば、私の来し方は、まことに「良き師」に恵まれ、多くの「良き友」との出会いがあり、それらを通じて「良き書物」との出会いが生まれた。かけがえないそれらの貴重な出会いの大恩を受けて今の私がある。心からの感謝をささげ、合掌する思いだ。

良き師と良き書物についてはこれまでに何度か紹介し、本書でも再録させて戴いたのだが、良き友についてはつい親しさ先に立ってその機を逸し、今回もその轍を踏むことになったので一言触れておきたい。

多くの「良き友」の中で特筆したいのは「民間研での出会い」の中から生まれた先輩、同輩、後輩とのそれである。私はこれらの良き友を「仲間」と呼んでいる。「彼らは私の仲間です」とか、

「彼女はいい仲間です」という具合だ。出合ってから交誼が20年、30年と続いている仲間が北海道から鹿児島までいる。

頻繁に会うことは叶わなくなっているが、会えれば忽ち旧知の親しみに浸れるから嬉しい。そのそもその出合いが「民間研」であることが特筆したい理由なのだ。「民間研」の対義語は、ここでは「行政研」と押えておきたい。「行政研」とは、職務命令により、勤務の一部として受ける研修会のことであり、それに費やされる時間や金は「あちら持ち」である。公務なので場合によると「手当て」までつくこともある。

これに対する「民間研」は「公用、公務」ではない。金も時間も一切が「自分持ち」である。行政研の受講者と民間研の受講者の最大の相違点は参加者の「動機」である。「行きたくなくとも行く」のが行政研、「どうしても行きたい」のが民間研の参加動機である。

受講者席が後ろから埋まるのが行政研、前から埋まるのが民間研なのだ。参加者、受講者の気構えが全く違うのだ。私は密かに、民間研に「参加、出席するだけで既に一級の先生方だ」と思っている。

自分の時間と、少なからずの身銭を切っても学ぼうとする仲間との出合いが唯事で済むはずがない。胸襟を開き、手を握り合い、差しつ差されつ「本音、実感、我がハート」で話し合

う楽しさは至福と言うに足る。だから、20年も、30年も交誼が続くのだ。

この度の、思いもかけない、私の師道記念碑の建立の話も、ずばりと言えば「民間研」の出会いから生まれたものである。幸いにして88歳、米寿を迎えられたので、恐れ多くも瑞宝双光章の叙勲を拝受したことは無論大きな光栄だが、これを拝受した人の数は206万人を越える。だが、小学校の教員を全うしたに過ぎない身で、このような碑を、全国の方々からのご芳志によって建立されるといふ例は稀有の誉れと、唯々恐縮している。「民間研の仲間」は「良き友」の典型と言えよう。「良き師、良き友、良き書物」の大意に低頭合掌する。

# 一 どのような人と、どう出合ってきたか

——私をゆさぶった人・変えてくれた人——

「君、原案を出したまえ」

もう遙か昔になる。少し生意気な新卒駆け出しの五月のことである。

私は、PTAの文化部の担当を命じられていた。文化部の主催する行事の中の一つに、研修視察という親睦を兼ねた日帰り旅行があった。PTAの文化部委員と私とはどこを視察したらよいかということである。いろいろ話し合ったのだが、日帰りできるような所のおおかたはすでに行ったことがあり、まだ行っていないような所のおおかたは日帰りでは無理な場所なのであった。

いくら話し合っても委員の中でも話がまとまらない。止むを得ず、鎌倉・江ノ島方面と、油壺・城ヶ島方面との二つに絞り、いずれをとるか。PTAの理事会に委せるということにして原案を作り終えた。

実を言うと、そのいずれもが数年前に視察済みの所であったのだが、少し年数も経過してい

るので差し支えはないだろうということでも話を落ち着かせたのだった。そこに絞りこむまでが苦労だったので、原案がまとまった時には、委員一同は本当にほっとした。

さて、いよいよ理事会当日になり、文化部の原案が審議されることになった。むろん、私も、文化部の委員もその座に列していた。

鎌倉か、油壺か、そのいずれかに簡単に話が決まるだろうと考えていたのだが、理事会では意外に時間がかかり、いくら話し合ってもいずれか一方にはなかなか絞り切れなかった。

三十分以上も話し合ったのに結論が出ないので、一座には多少いらだちが見えてきた。その様子を見てとった議長はとつぜん私にむけてこう言った。

「なかなか決まらないので、野口君、君が原案を出したまえ。」

私は耳を疑った。「原案を出したまえ。」とはいったい何事か。数多い候補地の中から慎重な検討と吟味とを重ね、選びに選び、絞りに絞って二つの候補地を決めているのではないか。

その両者のいずれをとるかはこの理事会で決定すべきであり、その責任はまさに議長にあるはずだ。つまりは、議長の議事運営の拙さから審議が長びいているのである。その責任を棚上げにして、「原案を出したまえ」とはどうしたことか。「原案」は、候補地鎌倉と油壺である。「原案」はすでに出されているではないか——、私はそう思った。

そこで私は、次のように議長に応えた。

「原案はすでに出しております。文化部の原案は、数ある候補地の中から、選びに選んで二つに絞りました。そのいずれかに決めていただくのがこの理事会です。もう少し、話し合いを続けてください。」

すると、議長は次のように言った。

「すでにかんりの時間話し合ったのに結論が出ない。これは、原案が曖昧だからだ。そこで、きちんとした原案を出してもらいたい。」

生意気盛りの若僧にはこの言葉はかなりカチンときた。私は、重ねて言った。

「いや、文化部としての原案は出しております。さらに重ねていずれかの案を出すことは僭越だと思えます。原案に基づいての審議をしてください。」

この言葉を聞いたとたんに、議長の語気が変わった。

「馬鹿なことを言つては困る。こんなものが原案と言えるか。原案というのは、一つに絞られていなければならぬ。その原案の是非がこの理事会で問われるのだ。」

「さつきから審議が長びいているのは、原案にもなっていないいい加減な提案がなされているためだ。だから、さつきから、もう一度原案を出したまえと言っているのだ。もう一度、原

案を作り直して来たまえ！」

私は、この勢いに圧倒されて、言われていることの真意がつかめず、さらに一言、二言弁解めいたことを言ったように思う。

この様子を見かねて中を取る人があって、私が「原案」を改めて作るまでもなく、視察地は油壺にようやく決着を見たのであった。

理事会が終わって、職員室に戻るべく廊下を歩いていた私のところにPTAの副会長が走ってきて、「野口先生！」と声をかけた。

「いやあ、申し訳ないことをした。何しろ、会長は短気なもんだから……。先生には、とんだ失礼をしてしまったねえ。まあ、気を悪くしないで勘弁してくださいよ。」

副会長は、私の心の中を察して優しく慰めてくれたのだが、実は、私は自分の心が落ち着くにつれて「原案」という言葉にこだわり始めていた。

なるほど「原案」というものは、その是非、当否はともかくとして、一つに絞られていなければならぬものかも知れない。すると、やはり私たちの作った案は、あれは「原案」にはなっていないのかも知れない——と。

【編著者】

野口 芳宏 (のぐち よしひろ)

1936年千葉県君津市生まれ。千葉大学教育学部卒業。公立小学校教諭、千葉大学附属小学校教諭を経て、公立小学校教頭、校長を務める。退職後、北海道教育大学教授、植草学園大学教授等を歴任し、現在植草学園大学名誉教授。「鍛える国語教室」研究会、授業道場野口塾各主宰。また2009年7月-15年12月千葉県教育委員を務めた。

著書に『野口芳宏 第一著作集全20巻』『同 第二著作集全15巻』『鍛える国語教室シリーズ』（以上、明治図書）ほか多数。

## 教師人生を楽しむ

2024年11月23日 初版発行

編著者	野口芳宏
発行者	横山駿也
発行所	株式会社さくら社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-20 ワカヤギビル5F TEL：03-6272-6715 / FAX：03-6272-6716 <a href="https://www.sakura-sha.jp">https://www.sakura-sha.jp</a> 郵便振替 00170-2-361913
ブックデザイン	クリエイティブ・コンセプト
印刷・製本	中央精版印刷株式会社

©Yoshihiro Noguchi 2024, Printed in Japan  
ISBN978-4-908983-78-8 C0037

\*本書の無断複写・複製・転載を禁じます。  
\*乱丁・落丁本は、送料小社負担にてお取り替えいたします。